

## 20世紀初頭ハンガリーで出版された日本語教科書とその時代背景

近藤正憲\*

キーワード: 中東欧, ハンガリー, 日本語教育史, 教科書, 20世紀, ヨーロッパ

### 要旨

戦前の中東欧の日本語教育についてはまだ知られていないことが多い。しかし、政治的、経済的な交流の深まりとともに中東欧地域はこれまでになく日本人に身近な存在になりつつあり、現時点でこの地域の日本語教育の歴史について研究することは意味のあることであると考えられる。

本稿は20世紀初頭にハンガリーではじめて出版された日本語教科書を題材に、出版された当時の日本についての知識と、背景となった社会状況を明らかにすることを目的とする。

ハンガリーではじめての、ハンガリー語で書かれた教科書は1905年に出版された。同書は日本に長期滞在した経験のあるハンガリー語母語話者が自らの経験と知識を総動員して書き上げた著作であると考えられる。今日から見ると教科書としては難点が多いとは言うものの、母語で書かれた教科書の出版は日本語学習の大きな障害の一つを取り除いた点で高く評価されるべきである。

また、同書の出版という事実そのものが当時のハンガリー人一般の日本に対する興味の高まりを物語っている。この日本への関心の高まりは日露戦争という政治的イベントが契機となったものであるが、この背景には当時のハンガリー人自身が持っていた反露意識と、高揚するナショナリズムが存在していたと考えられる。

この反露意識の裏返しとしての親日意識は自ずと限界があった。極東において帝国主義的性格を強める日本がロシアとの協調関係を築き、足元のバルカン半島でスラヴ系諸民族による反オーストリア＝ハンガリーの運動が激化するにつれ、日本に関する興味関心は次第に退潮していった。

中東欧に限らず、ある地域の日本語教育の歴史を振り返ることは、その国や地域や民族の対日認識の歴史そのものと向き合う作業であり、それを知ることは外国で日本語を教えるものにとっては特に大切なことであると考えられる。

\* KONDO Masanori: カレル大学哲学部東洋研究所日本研究学科客員講師(国際交流基金海外派遣日本語教育専門家)。

## はじめに

日本語教育の歴史の中で、戦前の中東欧地域(本稿では現在のポーランド、チェコ、スロヴァキアおよびハンガリーを指してこの用語を使うこととする)のそれはまだまだ明らかにされていないことが多い。

日本における日本語教育史研究の立場から見ると、中東欧は主たる研究の対象になってこなかったように思われる。関正昭は『日本語教育史研究序説』において19世紀から戦前のヨーロッパ諸国における日本・日本語研究について記述しているが、中東欧については、寺川喜四男の研究に依拠しつつ、1920年代にハンガリー日本学講座が始まり、ポーランドで日本文学、日本語が講じられた事実を言及するにとどまっている<sup>1</sup>。

日本と中東欧の文化交流史研究の立場からは、1981年9月に東京と京都で行われた「日本と東欧諸国の文化交流に関する国際シンポジウム」において発表された日本と中東欧諸国の文化交流に関する研究の中に明治時代以降の日本語教育に関する記述が若干見られる。たとえばポーランドでは1919年に初めての日本語コースがワルシャワ大学に開設されたとしており<sup>2</sup>、チェコスロヴァキア(当時)ではヒルスカー(Vlasta Hilská)が1939年に口語日本語の教科書を出版したとしている<sup>3</sup>。またハンガリーについても1924年にプレーレ・ヴィルモシュ(Pröhle Vilmos)がパーズマーニ・ペーテル大学(Pázmány Péter Egyetem、現在ブダペストにあるエトヴォシュ・ロラード大学の前身)の教授に任命され、不完全ながら日本学の教育が始まり、日本語も一部教えられたとしている<sup>4</sup>。しかし、この研究における日本語教育史に関する記述は少なく、取り上げられている内容を見ても、教授内容や文法把握等に踏み込んだものは全くない。

20世紀末にいたるまで、日本と中東欧との相互交流が、地理的な遠さから、また後には政治的な理由から、他の地域に比べて振るわなかったことは事実であろう。しかし、いわゆる旧東欧諸国は20世紀末の体制変換以降、開放政策への転換を進めてきた。また2004年にはEU加盟という大きな政治的変動を経験し、その社会環境も大きく変化した。今日においてはEU域内における製造業の中心地としての地位を確立しつつあり、日本企業の進出の一大拠点ともなっている。そして日本人一般にとっても、これまでになく身近に感じられる国になりつつある。現時点で、中東欧の日本語教育の歴史を振り返ることは意義のあることであると考えられる。

今日のわれわれにとって、ある言語に対する興味関心はその対象となる言語のみならず、その言語を持つ人々、その言語が公用語とされる国家に対する興味を反映していると見るように思う。日本と直接の利害関係がなく、日本人と邂逅する機会のほとんどないハンガリー

<sup>1</sup> 関 正昭 『日本語教育史研究序説』246頁(スリーエーネットワーク、初版、1997年)。

<sup>2</sup> 『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』20頁(東欧史研究会・日本東欧関係研究会、1982年)。

<sup>3</sup> 同上書 48頁。

<sup>4</sup> 同上書 97頁。

人が、1905年という年に日本という遠隔の異国に興味を持ったということについては、日露戦争（1904-05年）という政治的な事件と関係付けずに考えることはかえって不自然であろう。この教科書の出版という事実は、当時のハンガリーにおける日本への人々の関心の高まりを表しているように思う。つまり、当時のハンガリーにおいては一般的な学術的な興味関心だけではなく、政治的な日本への興味関心が、日本と日本語に対して向けられていたということである。そしてそれは当時列強に独立を脅かされていた諸国、ならびに列強の支配に苦しむ諸民族においては、多かれ少なかれ共通した特徴だったのではあるまいか。日本に対する興味関心の高まりのヨーロッパらしい現れ方の一つとして、日本語の教科書が現れたと筆者は考えるのである。

以上の問題意識を持って、本稿においては1905年にハンガリーで出版された日本語教科書を題材に、ハンガリーにおける日本語教育の歴史を振り返ることとしたい。具体的には教科書に書かれている内容を分析し、出版の背景となった歴史的背景を明らかにすることを目的とする。また併せて、この教科書を手がかりに当時のハンガリーでどのような人物が日本語に対してどのような知識をもち、どのような知識をハンガリー人読者に提供しようとしたのか、また当時の人々が日本語に何を期待したのかを考えたい。

なお、筆者はこの日本語教科書について2003年9月にスイス、ベルン市で行われたヨーロッパ日本語教育シンポジウムで発表した。本稿はその後の研究、分析を追加し、まとめ直したものである。

## 1. 考察対象の教科書について

まず、考察対象の書籍を紹介しよう。書名は“JAPÁN NYELVTAN (Gyakorlati japán-magyar-német beszélgetésekkel, hét eredeti japán írástáblával)”<sup>5</sup>である。書名の邦語訳は『日本語文法(実用的日本語—ハンガリー語—ドイツ語会話, 7種類の日本語文字—覧付き)』である(以後『日本語文法』と略記)。著者は不明であるが、ブダペストにある Révai és Salamon ny. (レーヴァイとシャラモン出版社)で出版されている。

この書籍は“Rozsnyai Gyors Nyelvmester” (『ロジニャイ スピード言語マスター』)という言語速習本シリーズの一つとして1905年に出版されたもので、ページ数は65頁ある。表紙に「教師なしで学ぶ (tanító nélkül)」という副題が書かれていることから語学の独習本として出版されたことがわかる。

同書は後述の「会話集」の部分にドイツ語で書かれている部分もあるが、文法や表現の説明、

<sup>5</sup> “JAPÁN NYELVTAN (Gyakorlati japán-magyar-német beszélgetésekkel, hét eredeti japán írástáblával)” (Budapest: Révai és Salamon ny., 1905) OSzK (Országos Széchényi Könyvtár) 国立セーチャーニ図書館, 21.067.

および48頁から56頁にかけて書かれている「ハンガリー語・日本語辞典」の部分も、日本語のローマ字書きのほか、ハンガリー語の単語しかない。このことから、著者が想定していた読者の対象がハンガリー語の母語話者であったことは間違いないであろう。

『ロジニャイ スピード言語マスター』は筆者が確認した範囲では21の言語で同様の書籍、すなわちハンガリー語を母語とする読者を対象にした独学用語学教科書を作っている<sup>6</sup>。日本語はその15番目の本として出版された。

このシリーズの中で極東アジアの言語は日本語しかない。それどころかアジアの中で大きな話者人口を持つ中国語、インドの諸言語やペルシャ語、アラビア語、マレー語などが入っていないにもかかわらず、当時決して大国ではなかった日本の言語である日本語だけがこの中に入っている。

一方、『日本語文法』の出版以降に出された教科書で扱われている言語は、ヘブライ語、ポーランド語、現代ギリシャ語、トルコ語、エスペラント語、ブルガリア語の6言語である。当時のオーストリア＝ハンガリー二重君主国の一半であるハンガリー王国において、ヘブライ語は自国の経済に巨大な影響力のあるユダヤ人の言語であり、ポーランド語は同君連合オーストリアの重要な一部ガリツィアの住民の言語である。またトルコ語はかつて140年あまりに亘って自らを支配した旧支配民族の言語である。それら日本語より身近に感じられたであろう諸言語をさしおいて、日本語の教科書が出版されたことは、日露戦争期の日本に対するハンガリー人の熱い視線を反映しているように思われる。

次に『日本語文法』の内容を検討することとしたい。なお同書は現在ハンガリーの国立セーチャーニ図書館に保存されている。傷みがひどく、本文に欠損している箇所が多くあり、判読不能の部分も複数箇所あるため、翻訳が不完全な部分もあることを予めご了解願いたい。また引用中欠落している部分については「(欠落)」という印で表した。

## 2. 『日本語文法』の内容考察

『日本語文法』の目次は下記の通りである。

[目次]

文法(1-34頁)

A: 日本語の口語音声と発音(1 母音とその発音, 2 子音とその発音, 3 二重子音, 4 音節の発音一覧), B: 音節の形成, C: 音の変化, D: ストレス(強調), E: 名詞, F: 形容詞, G: 代名詞, H: 数詞, J: 副詞, K: 後置詞, L: 接尾辞, M: 接続詞, N: 動詞, O: 語構成。

<sup>6</sup> 同シリーズで出版されたのは、①ハンガリー語(ドイツ語話者用)、②ドイツ語、③フランス語、④英語、⑤イタリア語、⑥ロシア語、⑦スペイン語、⑧ポルトガル語、⑨ラテン語、⑩ルーマニア語、⑪スロヴァキア語、⑫セルビア語、⑬クロアチア語、⑭チェコ語、⑮日本語、⑯ヘブライ語、⑰ポーランド語、⑱現代ギリシャ語、⑲トルコ語、⑳エスペラント語、㉑ブルガリア語である。

会話集(35-47 頁)

ハンガリー語・日本語辞典(単語集)(48-56 頁)

日本語の文字について(数を表す漢字, カタカナ, ひらがなの一覧表)(56-60 頁)

日本文字による日本語例文, 文章とその説明(61-64 頁)

上記のように『日本語文法』は, 大きく分けて五つの部分から成り立っている。すなわち ①「文法」, ②「会話集」, ③「単語集」, ④「文字について」, ⑤「日本語文章例」である。文型練習や練習問題などドリルの部分は一切ない。したがって独学用の教科書と銘打っているものの, 実際には独習者には利用が難しい。

## 2-1. 「文法」部分の説明について

同書の「文法」部分内容的特徴は下記の 7 点にまとめられる。

- (1) 文法, 発音等について対象言語である日本語とハンガリー語を対照させて論じている部分が随所にある<sup>7</sup>。特にそれは音声の説明と文法のうち助詞の説明において顕著である<sup>8</sup>。
- (2) 音声についても大きな注意が払われている。そしてその中でハンガリー語以外のヨーロッパの言語を対照させて論じている部分がある。
- (3) 『日本語文法』の文法把握は基本的にヨーロッパの言語の文法概念を応用して(というより無理やり当てはめて)説明している<sup>9</sup>。したがって, その説明には無理があり, 所々混乱をきたしている<sup>10</sup>。また別のある部分では自分も十分理解していないことを告白してい

<sup>7</sup> 前掲 “JAPÁN NYELVTAN” (Budapest: Révai és Salamon ny., 1905) 「日本語のアルファベットはアイウエオというがこれには同時に(欠落)母音が含まれている。以上にハンガリー語の a, i, u, e, o と同一と考えることはできない。日本語の母音については, 次のことを基本的に知っておく必要がある。全ての母音はもともと短い。たとえばハンガリー語の母音 nagy (大きい)の a, kis (小さな)の i, csurog (流れる)の u, nem (ない)の e, sok (たくさん)の o に似ているが, i と u は特に短く, 聞き取れないほどであり, 往々にしてその音を省略してしまう。たとえば『ひとつ (hitotsu)』は htocz, 『ふたつ (futatsu)』は ftacz のように」(1 頁)。また, が行音については全て「が行鼻濁音」であることが書かれている(1 頁)。「g の音は通常鼻音であり, 東京の言語用法上特にそうである。澄んで聞こえることもあるが, 接尾辞(助詞)としての ga は常にどんな場合でも鼻音である」

<sup>8</sup> 同上書「日本語では(ハンガリー語と同様に)母音の長短に特に気をつけなくてはならない。なぜなら, それによって意味の違いを生じる単語がたくさんあるからである」(1 頁), 「日本語はハンガリー語と同様に前置詞を用いず, 後置詞を用い, それは名詞の後ろに現れる」(19 頁)。

<sup>9</sup> 同上書 ① 名詞の説明の中で最初に名詞の性について述べている(5 頁)。「日本語には性による単語の相違は存在しない。しかし, 生き物についてその性差を表現したいときには男性であれば o- または os- を, 女性であれば me- または mes- という言葉で表す。これらは名詞の前に常に現れる。あるいは os または mes の後に名詞(欠落)が現れる」② 再帰代名詞についての説明は本来必要ないはずだが入っている(11 頁)。「日本語には再帰表現がない。カラダとかミという言葉を使って次のように表す。『カラダヲアラウ』」③ 名詞については性, 数と敬意表現に大きな注意が払われている(4 から 11 頁)。

<sup>10</sup> 同上書 たとえば日本語の助詞については後置詞(névtótok)と接尾辞(ragok)に分けて説明している。しかし, この二つの概念の違いについて全く言及がない上, 両方に含まれている助詞も複数あり, よく読んでも理解できない。また動詞については態(能動・受動), 時制(現在・過去・第一未来・第二未来), 法(叙述法・仮定法・条件法・命令法等)について大きな注意が払われている(21 から 31 頁)ものの, ハンガリー語母語話者であっても, それを理解することが困難である。

る<sup>11</sup>。

- (4) 文法説明の中で動詞に大きな関心が払われている。その説明によると「連用形」を動詞の基本形としてとらえ、これを「gyōkalak (根の形)」と呼んでいることから、ホフマンの著作の影響を受けている可能性が高い<sup>12</sup>。
- (5) 『日本語文法』の中に出てくる語彙や音声には関西方言の特徴が複数看取される<sup>13</sup>。
- (6) 語構成の分析においては漢語と和語の相違とその組み合わせに注目しており、著者がその関係の知識も持ち合わせていたことを窺わせる<sup>14</sup>。
- (7) 文法とは直接関係ない言語習慣や敬意表現の用法などについても書いている<sup>15</sup>。

## 2-2. 「会話集」の内容の分析

会話集には全部で 235 の会話体の文が、「郵便局」、「住居」、「食事」、「飲酒」などという 13 のテーマごとにまとめられている<sup>16</sup>。ページの構成は左から ① ハンガリー語、② ドイツ語、③ 日

<sup>11</sup> 同上書「(日本語には)名詞の前の定冠詞は存在しない。名詞を主語として使う場合は ga または wa を後ろにつけて使う。しかしながら mo, to, ya, aruiwa, bakari など主語を表す場合がある。ga は(私の雑駁な知識では)その単語を主語であるとはっきり示す場合に使い、wa は主語を強調する場合に使うのである。たとえば『雪が降ります』、「その場所はあいていますか」というように。」この部分は、著者が主格としての「が」と「は」の区別の説明が必要であると認識しつつ、それができないことを表している。

<sup>12</sup> 関 正昭『日本語教育史研究序説』241 頁。

<sup>13</sup> 前掲“JAPAN NYELVTAN”①「ku + wa: kwa または ka, gu + wa: gwa または ga である。この澄んだ発音(おそらく後者のこと)は東京の言語用法において習慣的である」(4 頁)。<sup>②</sup>一人称人称代名詞の中に「わし」がある(7 頁)。<sup>③</sup>二人称人称代名詞の中に「おもと」がある(8 頁)。<sup>④</sup>動詞 home の命令形 homeyo と書いてあり、homero はない(27 頁)。<sup>⑤</sup>形容詞の音便形 takai (たかい)⇒ tako (たこう), warui (わるい)⇒ waro (わろう), hiroi (ひろい)⇒ hiro (ひろう)となっている。ただし、mazushii (まずしい)⇒ mazushiku (まずしく)となっている(6 頁)。<sup>⑥</sup>動詞 konomi の打消しの音便形が konomanu となっている。(ただし、konomanai も併記されている。)(21 頁)。<sup>⑦</sup>否定表現の過去形に「ナカッタ」とともに「~ナンダ」が使われている(21 頁)。<sup>⑧</sup>「太っている」という意味で“hotehote”という言葉、また「手をたたいて」という意味で“chocho”という表現が入っている(17 頁)。この二つについてはどのような日本語の単語に対応するのか当初まったく不明であった。ところが、筆者が 2003 年 9 月に行った発表の際、日本人参加者の中から次の意見を聞くことができた。前者については『現在のポテポテ』で自分の子供のころはそう言っていた。」とのこと、後者については『「ちょちょう」といいながら手を叩きつつ人を呼ぶ場合がある。」とのことであった。以上を指摘したのはどちらも関西地域出身者であった。

<sup>14</sup> 同上書 32-33 頁。

<sup>15</sup> 同上書 31 頁「今日においてすでに日本の知識人はすべて丁寧な形の動詞の活用を用いる。それは決して自分の雇い人の前だけではなく、最低限の敬意を示さなければならない場合は誰の前でもそうである。知らない人や自分と同じ地位の人の前では更に丁寧な形にする必要がある。例えば自分の従者であれば「watashi no heya ni mimotsu wo motte koi! (わたしのへやにみもつ(ママ)をもってこい。)」ということができる。しかし、もし他人の従者に同じことを頼もうとするなら「watashi no heya ni mimotsu wo motte kite o kure. (わたしのへやにみもつ(ママ)をもってきておくれ。)」となる。また、もし親しい友人にこれを頼むときには「watashi no heya ni mimotsu wo motte kite kudasare. (わたしのへやにみもつ(ママ)をもってきてくだされ。)」となる。(中略)三人称の前では人称代名詞が使われることは稀である。これらは文の意味から見さなければならない。同様に文の主語が何らかの形で簡単にわかるような場合には、一人称と二人称においても人称代名詞が落ちることが多い。

<sup>16</sup> 同上書 35-47 頁。テーマは次のとおり。( )内の数字は取り上げられた文の数である。① 質問(14)、② 日本語の会話(9)、③ 住居(26)、④ 食事(17)、⑤ 飲酒(9)、⑥ 朝食(13)、⑦ 郵便局(9)、⑧ 時刻(19)、⑨ 天気について(44)、⑩ 健康について(15)、⑪ 会話に引き込む(23)、⑫ 鉄道で(8)、⑬ 船で(19)。

本語(ローマ字書き), ④ 日本語(ハンガリー文字書き)の順で並んでいる。

この会話集を一読して気がつくことは普通体と丁寧体の表現が混ざっている点である。丁寧な表現のほうが数としてははるかに多いが、非常に丁寧な表現のすぐ後に、普通体の、高飛車な表現が書かれていたりするので日本語の部分だけ注目して読んでみると驚かされる<sup>17</sup>。更にその普通体の表現は、必ずしもハンガリー語やドイツ語の部分の敬意表現と対応していない。

これは単なる間違いとは言いきれない二つの要因がある。一つは主語が一人称か三人称の文の場合、ハンガリー語では話し相手に対する敬意を表現できないのに対して、日本語は文末が「ですます体」であるかどうかで必ず表現してしまうからである。この例に当たる例を挙げると、「住居」のテーマにまとめられている部分にある。日本語文が「kono heya wa chisasugiru ga hoka ni óki no wa nai ka? (この部屋は小さすぎるが、ほかに大きいのはないか。)」と普通体の文になっていて、これはちょっと横柄な感じを受ける。一方これに対応するハンガリー語文は「Ez a szoba nekem kicsiny; nincs egy nagyobb?」、ドイツ語文は「Dieses Zimmer ist mir zu klein; Haben Sie kein grösseres?」となっている(主語が三人称)。また、別の部分では日本語文が「sore wa takasugite watashi ni wa harae nai. (それは高すぎて私には払えない。)」となっているのに対し、ハンガリー語文が「Az drága, annyit nem fizethetek.」、ドイツ語文が「Das ist mir zu teuer; das kann ich nicht bezahlen.」となっている(主語が一人称)。日本語文の場合、末尾が「ありませんか」になれば丁寧になるが、ハンガリー語にしるドイツ語にしる、そうはいかなかったたのであろう。

もう一つの要因は、普通体の文のほとんどが、物やサービスを購入する「顧客」としての発話場面に集中しているという点である。この点については、当時の日本で著者がもっとも耳慣れた表現を書いたという推測は成り立ちうると考える。

この会話集はある意味実用的な性格を持っている。日本に滞在する外国人が部屋を借り、その値段や条件を交渉するときの表現や、隣人との社交上よくあるような場面(昼食に誘われ、時間を調整して約束する等)を想定し、挨拶に続くいくつかの表現を収録してある。天気表現に44の文を収録しているのも、日本語の会話場面で天気の話が多く出てくることを反映しているのかもしれない。著者の日本での滞在生活の一端が垣間見えるようで非常に興味深い。

しかし、中には自分が発話する表現としたらちょっと首を傾げたくするような表現もある。それは「Domo anata wo hitori de yukaseru koto wa dekimasenu. (どうもあなたを一人で行かせることはできません。)」などという表現はどんな場合につかうのであろうか。この点について、あくまでも推測ではあるが、『日本語文法』の著者自身が誰かから言われた表現なのではないかと筆者は考える。慣れない土地の外国人をいたわる隣人の発話を深く記憶にとどめてあったのでは

<sup>17</sup> 会話集の文 235 のうち、普通体の文は 34 である。

ないだろうか．そうであればその直後の「Ó anata wa jitsu ni go-shinsetsu de gozimarasu. <sup>(ママ)</sup>  
(おおあなたは実にご親切で<sup>(ママ)</sup>ごじまらす.)」という文がくるのも納得がいくのである．

この会話集の部分を入れた目的は実用的な会話場面における利便性のためだと考えられるが、この会話集自体が、著者の日本における思い出深い表現の集積としての意味を持っているように筆者には思われる．

### 2-3. 「単語集」について

ここには 1,324 のハンガリー語の単語がアルファベット順に並び、対応する日本語がローマ字書きで添えられている．ローマ字表記はすべてヘボン式である．日本語の単語を検索する部分はない．形式上動詞は連用形が基本形として書かれており、形容詞は「あたらしき / あたらしい」と新旧二つの形が併記されている．この部分は読者が会話に必要な語彙を集めるためのものであろうと思われるが、実際にどの程度役に立ったかわからない．また、内容を見ると「統治する」の意味で osame という単語を入れるなど、著者がかなり高度な語彙を知っていたことが見て取れる．

### 2-4. 「文字について」および「日本語例文」について

日本語の文字が書かれている部分の説明について次の各点を指摘しておきたい．

日本語文法の中で日本語の文字が書かれている部分は 58 頁から 64 頁までの間である．

ここには漢数字の一覧、カタカナ、ひらがなの一覧、そして日本語の文章が書かれている．なぜ漢数字の一覧があるのかという点については、著者が「すべての漢字を読者に見せたいが、ページの制約から漢数字だけ書いた」と書いている．一方、日本語の文章は日本語で書かれた小さな物語が縦書きに書かれている．

カタカナ、ひらがな、漢数字の一覧表、および日本語の文章の例としてあげている物語の文については、日本人が書いたものではなく、外国人の書いたものであると筆者は考える．確かにはね・はらいには注意しながら書いているようだが、所々カナクギ文字になっている上、カタカナの「シ」と「ツ」の形を見ても、今日のヨーロッパ人の学習者にみられる特有の形をしている(図 1 参照)．

しかし、単なる初歩的な日本語学習者ではないと思われる．なぜなら、カタカナ一覧表の「ネ」に「子」の字を当てていることや、ひらがな一覧表の「お」、「そ」のくずし字的な特徴から見ると、毛筆で字を書く訓練を受けたようにも思われるからである(図 2 参照)．断定はできないものの、著者自身が書いたものなのではないかと思われる．

次に物語の内容を見てみたい．物語は縦書きで書かれている．そして物語の一行一行が日本語の漢字かな混じり文、ひらがな文、カタカナ文、ローマ字文、ハンガリー語訳の五種類の文で書き表されている(図 3 参照)．題名は「虎と狐との話」、内容は「虎の威を借る狐」の故事を短くま





とめたものであり、その全文は下記のとおりである。

### とら きつね はなし 虎と狐との話

あ とときとら いっさい きつね とら  
或る時虎一疋の狐を捕へてそれを食わんとせり。其時狐わ虎に向いてわれわけだもののおーにして  
(欠落) なんぢ若し我を食わゞ 忽ち罰をこーむる可しと云へり。併虎わそれを信せざりし故に狐わ又  
なんじも わ ことば  
汝若し我が言をうたがわば我が後 (欠落) すべての 獣 皆必ず我を畏れて逃げ走らんと云へり。とら  
わ 狐の言葉をためさんと其のあとにつきて歩みにすべての 獣 わ皆虎をおそれて逃げ去れり。されど  
とら おのれ おそ ことば  
虎わ己を畏れて逃げしとわ心づかず、眞に狐を畏れし事と思えり。されば主人の 勢 またわ親の威光  
をたのみて威張る物を 諺 に虎の威を借る狐と云うなり。

物語の本文の中にはいくつかの間違えがある。一疋(いっぴき)を「イッテイ」と読んでいるところ、「去る」を「ハシル」と読み下しているところなどはこのレベルの学習者としては決して珍しくない、むしろよくやっている学習者の誤用である。しかし、接続助詞の wa について、本来「は」となるべき部分がすべて「わ」で書かれている点については、これほどの知識の持ち主がする間違いにしては少々不可解である。

さて、この物語はもともと中国の古典『戦国策』の中に出てくる物語である。なぜ筆者はこの物語を選んだのであろうか。この物語は『日本語文法』の末尾に位置していることから本来の目的は学習項目の練習であろうと思われる。また文章の翻訳も入っているので、読み物としても興味を持たせるのが目的であったのかもしれない。その目的であればこの物語は短くて内容も単純であり適切な役割を果たしていると言える。その上、トラとキツネの取り合わせというのはヨーロッパ人にとってみると、エキゾチックな感じのする物語にも思われる。また、文が縦書きなので 61 頁以降は右上から左下へと読まなくてはならず、見開きの 62 頁、63 頁は本の中心部にある左側頁の右上から左下へ読んだ後、右側の 63 頁の右上から中心の左下へと読まなければならない。これをはじめて目にした学習者はヨーロッパの言語との差異を強烈に感じたのではないだろうか。この部分にはそのような異国情緒を感じさせる意図があったのかもしれない。

### 2-5. 『日本語文法』の内容考察のまとめ

以上からみると『日本語文法』の著者については次のような人物像が浮かび上がってくる。

- (1) 『日本語文法』はハンガリー語を母語とする著者が著したもので、ハンガリー語を母語とする読者を対象に書いたものである。
- (2) 著者はヨーロッパ他の言語の素養があったと思われる。
- (3) 著者は日本に長期間に亘って滞在した経験がある。
- (4) 著者は日本語の文字についても書く能力があり、漢字の音訓についての知識もあったと考

えられる。

- (5) 著者は関西に滞在していた、もしくは日本語習得上、関西方言のある日本人からの強い影響を受けた可能性が高い。
- (6) 著者が言語学の研究者であった可能性は低い。しかし、当時既にヨーロッパで出版された日本語に関する書籍を参考にしながら『日本語文法』を完成させたと思われる。

20 世紀初頭に日本に長期滞在して日本語を習得したハンガリー人が存在していたことは事実としてそれほど驚くに値しないかもしれない。しかし、どうして言語学者とは思えない著者が『日本語文法』を著すに至ったのであろうか。前述のようにこれを説明するには 20 世紀初頭のハンガリーの社会的状況と日露戦争という政治的事件が関係していると思われる。次に『日本語文法』の出版当時のハンガリーの社会背景について検討を加えたい。

### 3. 日露戦争当時のハンガリー王国と「親日的」世論

#### 3-1. オーストリア・ハンガリー二重君主国

20 世紀初頭のハンガリーの状況を描く前に、ハンガリーの近代史に少し言及しておきたい。1848-49 年の独立革命がロシア軍の介入とオーストリアの反撃によって失敗した後、ハンガリーは独立を失っていたが、オーストリアは多民族国家再編成のため、巨大な人口を持つハンガリー人を同盟者を選び、1867 年大妥協(アウスグライヒ)を成立させた。これにより、ハンガリー王国が誕生した。同王国は独自の憲法、議会、政府を持つ独立国として、内政については完全な自治権を持っていたが、一方でハンガリー国王はハプスブルク家のオーストリア皇帝その人が兼ね、また軍事、外交、財政については共通の閣僚をもつことが決められていた<sup>18</sup>。つまりオーストリアとの一体性は両国間の複雑極まりない取り決めにより、国家の根幹部分で保たれていたといっ  
てよい。しかし、この根幹部分での一体性を克服し、いかに真の独立に近づけるかが、次の「世紀転換期」から、第一次世界大戦終結までの時期におけるハンガリーの新しい世代の政治指導者たちにとって最も重要な政治的課題であった。

日露戦争期におけるハンガリー王国と現在のハンガリー共和国とを単純に比較することは非常に難しい。というより、ほとんど無意味であろう。むしろ比べれば比べるほど対照的な特徴が浮かび上がってくる。まず前者はオーストリア＝ハンガリー二重君主国という列強に属する巨大な国家連合の一半であり、後者は中央ヨーロッパに位置する比較的小さな独立国である。また前者は支配民族であるハンガリー人が総人口の過半数にもとどかない多民族の大国であるのに対し、後者はハンガリー人が人口の圧倒的多数を占める、単一民族国家に近い小国である。前者は貴族

<sup>18</sup> 矢田俊隆『ハンガリー・チェコスロヴァキア現代史』68 頁(山川出版社, 2 版 2 刷, 1994 年)。

主義的な、半ば封建的な特徴を持つ君主制国家であるが、後者は(1989年以降)民主主義的な体制の共和制国家である。ただ一点、「ハンガリー民族が政治の主導権を持ち続けている」という点で両者は共通する。ただ、20世紀初頭のハンガリー王国では今日と違い、政治的主導権を持っていたのが王国全体の中では少数民族に属するハンガリー人の中の、ほんの一握りの貴族層であったことは付言しておかなくてはならない。

20世紀初頭のハンガリー王国の政治的特色は、およそ非民主的なハンガリー(マジャール)人の寡頭専制支配であったとすることができる。当時二院制の議会の下院には選挙で選ばれた議員がいたが、その選挙権は財産、教育、職業によって非常に制限され、非ハンガリー系諸民族の代表のみならず、ハンガリー人の下層階級、特に全農民を除外していたからである<sup>19</sup>。

### 3-2. 世紀転換期ハンガリーの時代的特徴

歴史上の用語として19世紀末から20世紀初頭の時期を「世紀転換期」と呼ぶことが多い。国により、地域により、この響きは様々であるが、この時期のハンガリーは1848-49年の革命から50年余りが過ぎ、1867年のハプスブルク・オーストリアとの大妥協(アウスグライヒ)を経て、ハンガリーが国家としての独立を回復し、社会的な安定と繁栄を取り戻した時期と符合する。つまり長い平和がもたらした繁栄を人々が享受することができる時代であった。また同時に、複数の民族の歴史的記念行事が重なったこともあって、ことさらに民族主義的な宣伝が巷に鼓吹された時期でもあった<sup>20</sup>。

当時のハンガリーの民族主義は、王国内部では被支配諸民族に対する強圧的な同化政策になって現れ、一方対外的には、同盟者であり、同時にかつての支配者であったオーストリアに対するハンガリーの主権強化の条件闘争として第一義的に現れ<sup>21</sup>、そして第二義的には1848-49年革命の敗北をもたらした侵略者ロシアに対する強い反感となって現れていた。

### 3-3. 日露戦争に対するハンガリー人の態度

開国以前から、ヨーロッパ諸国の人々にとって日本はエキゾチックな異文化世界の代表例として認識されてきた。特に日本の工芸品は19世紀半ばにヨーロッパ各国で相次いで行われた万国博覧会を契機にヨーロッパの富裕層の心をとらえ、工業デザイン等におけるいわゆるジャポニズム(Japonism)が流行を博する。ハンガリーにおいても著名な学者や美術商が日本を「探検」して多くの美術品を収集し、ハンガリーにもたらしている<sup>22</sup>。

<sup>19</sup> 同上書 72 頁。

<sup>20</sup> 具体的には、ハンガリーの征服一千年祭(1894年)、ハンガリー独立革命五十周年(1898年)、亡命先のトリノで客死した独立革命の指導者コシュート(Kossuth Lajos)の遺骨の埋葬等を指す。

<sup>21</sup> 矢田俊隆 前掲『ハンガリー・チェコスロヴァキア現代史』70 頁。

<sup>22</sup> 前掲『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』65-69 頁。

しかし、日露戦争はロシアという大国に対立する「国家としての日本」の姿を強烈にハンガリー人に印象付け、従来のイメージを大きく変化させる事件であった。当時の駐奥公使牧野伸顕<sup>23</sup>によると、日露戦争当時のオーストリアの宮廷はバルカン半島の情勢安定のためにロシアとの「表面提携」を進めつつあり、政治的には中立を守ろうとしていた<sup>24</sup>。一方、ハンガリーの政治的支配勢力であるハンガリー貴族層はこれに反して日本びいきとなった<sup>25</sup>。また産業革命の進行とともに現れてきたハンガリーの知識人層も多くは日本に味方する傾向があったとされる<sup>26</sup>。つまり、ハンガリー人のナショナリズムの高揚が日露戦争における親日的世論を支えていたものと考えられる。

このことは同時代の証言からも裏付けられる。牧野は別の部分でもハンガリー人の「親日の情」について著書『回顧録』に記しているし<sup>27</sup>、第二次世界大戦中のハンガリーで日本語辞書を作ったメツゲル・フェルディナント<sup>28</sup>は自身が日本語を学習し始めた動機について、日露戦争当時の日本の勝利を挙げている<sup>29</sup>。

日本に対する関心の変化は新聞記事における日本関連記事からもうかがうことができる。1850年代から1920年代までハンガリーで出版されていた出版物の中に『日曜新聞』という週刊誌があった。同誌に日本関係の記事がはじめて掲載されたのは「ペリー来航」についての記事で、1854年7月2日号である。以来1903年末までに87の記事が掲載されている。その記事の過半

<sup>23</sup> 牧野伸顕(1861-1949)は大久保利通の次男に生まれ、牧野家に養子に入る。外国留学の後外務省に入り、以後政府の要職を歴任、元老的地位を果たす。二・二六事件に遭遇するが難を逃れる。

<sup>24</sup> 牧野伸顕『回顧録』(上)265頁(中公文庫、4版、1992年)で牧野伸顕は次のように述べている。「<sup>オーストリア</sup>オーストリアは(日露戦争の)成行きについて直接の利害関係を持たないので、その点で態度を左右されることは無かったが、その宮廷と政府は<sup>バルカン半島</sup>バルカン半島において<sup>露国と表面提携</sup>露国と表面提携しつつあり、...

<sup>25</sup> 同上書267-268頁「今度の戦争では<sup>洪牙利および波蘭</sup>洪牙利および波蘭貴族の大部分は日本に同情し、(中略)洪牙利の貴族は更に積極的に日本に同情を示して、その勝利を望んでやまないという態度だったが、<sup>奥太利およびボヘミア</sup>奥太利およびボヘミアの貴族は概して露国側だった。しかし、それも大勢から言えばあまり熱意はなかった」

<sup>26</sup> 同上書268頁「なお一般社会の者は(中略)事態が日本に有利であることを望み、(中略)しかも喜ばしく感じられたことは知識階級の中堅層をなす法律家、実業家、教授、学生らが日本側に立って、この戦争を日本が起こした義戦と見ていたことであって、(後略)」

<sup>27</sup> 同上書308頁「そのころ(1905年:筆者注)<sup>ブダペスト</sup>ブダペストを通過する日本人は何の縁故もない<sup>洪牙利人</sup>洪牙利人たちに近づかれて歓迎されるほどの人気であり、...(後略)」

<sup>28</sup> メツゲル(Metzger Ferdinand)は戦間期、ハンガリー王国時代の在京公使館通訳官で1939年にハンガリーの著名な詩人、ペテーフィ・シャーンドル(Petőfi Sándor)とアラニ・ヤーノシュ(Arany János)の詩集の翻訳を行い、1944年にはハンガリー語と日本語の大辞典を出版した。

<sup>29</sup> 前掲『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』103頁「ハンガリー=日本文化交流の歴史と現状」資料:メツゲルからの手紙の訳文より「私がなぜ日本語を学ぼうとしたのか。それはブッチーニの蝶々夫人が理由ではありません。まだ私が中学生であった頃、『新報(Friss Újság)』という新聞を刷っている印刷所のわきを登下校のとき毎日通りました。ちょうどその頃、ハンガリーでのマスコミをもっとも賑わせていたのは1904-5年の日露戦争でした。私は靈感にうながされて毎日の記事に目を配るようになり、乃木大将、黒木大将、大山元帥、津島元帥、東郷平八郎海軍大将、明治天皇、旅順口といった名前に魅惑されました。133年前、ハンガリー民族は独立戦争に一旦は勝利したものの、その栄光の刹那にヴィラーゴシュではロシア軍がハンガリー軍を降伏させていました。オーストリア人は13人のハンガリーの将軍を絞首刑に処しました。私は乃木さんや東郷さんがロシアの世界的野望をくい止めることによって正義を行なったのだと感じました。私は武士道と愛国心の真価を認識することを学びました。(後略)」

数は日本の文化や歴史、昔話や人々の生活に主とした関心が注がれていた<sup>30</sup>。一方 1904 年から 1905 年までの間には 55 の記事が書かれており、そのほとんどが日露戦争の趨勢に絡んだ政治的、軍事的な内容についてのものである<sup>31</sup>。日露戦争がそれまでになくハンガリー人の関心を日本に強くひきつける契機になっており、しかもその関心は質的に変化していたといえる<sup>32</sup>。

日本びいきの感情は日露戦争終了後もしばらくの間続いたようで、1906 年の年末、『日曜新聞』のクリスマス特集号では「TOGO」と題する詩が掲載されている<sup>33</sup>。言うまでもなく、これは日本海海戦における東郷平八郎と日本海軍の活躍を賞賛する内容のものである。日露戦争に対するハンガリー人の視点を端的に表しているように思う。

以上から日露戦争期のハンガリーではその民族主義的な反露感情から日本に対してそれまでになく関心が高まり、日本に肩入れする世論が形成されていたといえることができるように思う。ちょうどその時期にハンガリー初の教科書である『日本語文法』が出版された。史料がないためその二つの事柄の関連性を断言することはできないが、教科書の出版に当時の世論が一定の促進作用を及ぼしたと筆者は推測する。

さて、ここで一点付言しておきたいことがある。それは、当時のハンガリー人の親日的な感情の根源を彼らの「アジア的な出自」に求める考え方についてである。確かにハンガリー人はアジア起源のフィン＝ウゴル系民族で、文化的にヨーロッパ化した後も言語や習俗にアジア的な痕跡を残している民族である。戦間期のハンガリーではいわゆるツラニズム (Turanism) の立場から、日本との友好関係を「民族的血縁関係」「兄弟民族の関係」として宣伝した一時期があったことも事実である<sup>34</sup>。また、今日においても日本人との社交的場面で、日本人とハンガリー人との「血のつながり」をまことしやかに話すハンガリー人がいることから、日露戦争期にも同様な考え方があったと推測する向きもあると思う。

<sup>30</sup> 拙著『戦間期における日露文化交流の史的展開』17-37 頁(千葉大学大学院社会文化科学研究科 学位論文 1999 年)。

<sup>31</sup> 同上書 54-55 頁。

<sup>32</sup> 同上書 46-51 頁。

<sup>33</sup> „Vasárnapi Újság 『日曜新聞』 -Karácsonyi Melléklet (クリスマス別冊)” 1906 年 12 月 25 日号。同紙は 1854 年に創刊された定期刊行物で、図版を多く取り入れた編集が人気を集め、1860-70 年代においては最も人気のある出版物の一つであった。

<sup>34</sup> 『東欧を知る辞典』288 頁(平凡社、新訂増補版、2001 年): 「ツラン (Turan) はユーラシア大陸全域に帯状に分布するウラル＝アルタイ系諸語族を総称する民族名であり、西のフィン＝ウゴル語族から東のツングース語族までを含む。このツラン系諸民族を自覚的な民族統一へと統合しようとした運動がツラニズム(トゥラニズムともいう)である。もともとはオスマン帝国においてアリア系民族に対抗する運動として始まった。しかし、19 世紀末に帝国のヨーロッパ撤退が決定的となると、運動の担い手はハンガリーに移った。(中略) 19 世紀末には建国 1000 年を迎えて民族の故地や言語の所属を探究する動きが活発化し、ハンガリー人の関心はかつてないほど大きく当方に向けられた。1910 年にツラン協会が設立される。また、第一次世界大戦後は戦争で失った東半分領土の回復要求や反ポリシェヴィズムとも結びついて、政治的な色彩を帯びるようになった。」戦間期の日本とハンガリーとの関係はツラニズム的な考え方がベースになっている。第二次世界大戦中ツラニズムは日本でもハンガリーでも膨張主義的な対外政策と結びついていたことから、戦後はまったく顧みられることがなく今日に至っている。

しかし、日露戦争当時、ハンガリー人の意識の中に日本人を「同種同属の兄弟民族」と見る視点は筆者がこれまで調べた限り存在しない。そして『日本語文法』の中にも日本人とハンガリー人の種の上での類似性に言及するところは全くなく、言語上の類似点をことさら強調する傾向も看取できないのである。

以上から当時のハンガリー人の「親日」性は彼らの「アジア的出自」によるものではなく、「反露」意識の現れと見るのが妥当であると筆者は考える。

#### 4. まとめと今後の課題

言語教育がある種の政治性を持つことは暗黙のうちに多くの人々に理解されていると思う。「国語教育」と名づけられた日本の国民に対する「日本語」教育が、19世紀後半以降、多様な方言を持つ日本列島各地で行われたことは、日本という国家の内的な統合を実現する上で非常に重要なプロセスであった。また、それだけでなく植民地化された台湾、朝鮮半島でも、民衆に「日本人」としての精神を植え付けるために強制され、教育されていったことは既に周知の事実である。第二次世界大戦中、日本の軍政下における日本語教育に関する近年の研究においても、その目的が単にコミュニケーションの手段としてだけではなく、大東亜共栄圏構想の下で「日本精神」の普及と現地住民の「皇民化」にあったことが分かってきている<sup>35</sup>。

一方外国語学習にもある種の政治性があるのも事実なのではないだろうか。外国語学習が学習者にとって不本意である場合を除いて、学習者は対象言語の母語話者の文化、国民や国家の政治的存在に少なからず興味を持ちながら言語を学んでいるのが普通である。

言語の教材を手にした人がその言語を学ぶためには、音声の特徴を学び、文法的なシステムを習得していく必要がある。もちろん単語を記憶する必要もあるし、慣用表現を身につけることも大切だ。「日本語文法」には当時のヨーロッパ人が考える言語習得上の基本的な必要事項である文法説明と単語集が入っていた。つまりそれによって「日本語を習得することができる」と思わせる書籍だった。言語を身につけることによって、受動的にはあらたな知識を得ることができ、また能動的には自らの考えを相手にぶつけることができる。ハンガリーで最初に出版された日本語教科書『日本語文法』は日露戦争期に、偶然ではなく、ある特別な思いをもった人たちによって出版された。この事実は、言い換えるなら同国の知識人層が日本という異文化に能動的に触れたいと強く望んだことを象徴的に表す事実と捉えることができるように思われる。そしてその背景にはハンガリーのナショナリズムの高揚があった。

しかし、ハンガリー人一般における親日的世論と日本に対する関心は、日露戦争が終結すると

<sup>35</sup> 関 正昭, 前掲『日本語教育史研究序説』68頁。

次第に退潮した。当時の世論はあくまでもハンガリー人の「反露」意識の一つの現れであって、日露の終戦は「反露」のシンボルとしての日本がその役割を終えたことにほかならなかった。

この時期のハンガリーは1905年の選挙で政権党の自由党が敗北し、オーストリアへのより強硬な要求を掲げる独立党が勝利した後、国王は議会によらない内閣を組織し、議会と対立した。このことからハンガリー人の政治的興味は主としてオーストリア＝ハンガリーの国内問題に集中することになる。そして更に重要なことはハンガリー人にとってのロシアの脅威が、遥かに遠隔の極東地域ではなく、近隣のバルカン半島や国内のスラヴ系諸民族の民族問題として現れてきた時期を迎えた点である。

1908年にオーストリア＝ハンガリーは1873年のベルリン条約以来、軍事占領していたボスニア＝ヘルツェゴヴィナの領有を宣言する。同地域には多数のセルビア系住民が居住しており、アドリア海への出口を求めて同地域の領有を目論んでいたセルビアはこれに激怒する。列強は戦争を回避するために努力し、結局セルビアはオーストリア＝ハンガリーのボスニア＝ヘルツェゴヴィナ併合を承認せざるを得なくなるものの、セルビア国内のオーストリア＝ハンガリーに対する感情は極端に悪化し、セルビア人の民族主義運動がセルビアでもボスニア＝ヘルツェゴヴィナでも激化していった。汎スラヴ主義の盟主をもって任じるロシアはセルビアの背後にあり、三国同盟による結びつきからドイツはオーストリア＝ハンガリーの側に立っていた。以後バルカン半島は「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれるようになり、1912-13年のバルカン戦争、1914年のサラエボ事件を経て、同年の第一次世界大戦勃発につながるという流れは歴史教科書に書いてありでありである。

一方、日本は日露戦争の結果、南満州の権益を得、第二次日韓協約締結を皮切りに朝鮮半島の本格的な植民地化を進めていった。日本は南満州においても帝国主義的利権の確保を図り、ロシアとの間で数次にわたる日露協約を結ぶことでロシアとの関係改善を進めていった。日本はロシアとの協調政策をとり、両国の北東アジアにおける協調は1917年のロシア十月革命に至るまで続くのである。

中東欧の人々の対日認識は日露戦争によって大きく変わったと言える。それはエキゾチックな異文化世界としての日本から、戦争を遂行する国家としての日本へと表現することができるだろう。日露戦争に際して世論が一般的にどのような態度をとったかは国、地域、民族により異なるが、概して「ロシアに対する感情」が重要な役割を果たしていたとすることができるように思われる。

ハンガリーにおいては反露的な民族感情が日露戦争において日本を賞賛する世論を生み出した。しかしこの親日的世論の本質はつまるところ「反露」の裏返しであって、日露戦争の終結が日本への関心の退潮をもたらしたことは、この時代におけるハンガリー人の対日認識の限界を示している。



対日認識にこのような限界があったことを前提とするなら、『日本語文法』が出版された事実は、内容の問題点は別として、ある程度ポジティブに評価されていいのではないだろうか。

『日本語文法』がハンガリーにおけるその後の日本語教育においてどのような影響を与えたかは現時点では分からない。しかし、一般的に言って、マイナーな言語を学ぶ場合、母語によって書かれた教科書は、例え内容に難点があっても母語であるがゆえに利用される場合が多く、この『日本語文法』もその後の学習者に利用された可能性は強いと思われる。ハンガリーの大学で日本研究の拠点が設置されたのは1920年代の中ごろで、それまでの20年近くの期間、日本語を学ぼうと思う人々にとっては、おそらく貴重な本だったのではないかと推測される。

『日本語文法』は日本人との幸せな一時期を日本で過ごした一人のハンガリー人が、多くの同朋の求めに応じて懸命に書きあげた文法解説書であった。今日のみから見ると内容としては問題があるものの、日本語の特徴や日本人の言語習慣をハンガリー語でまとめてあり、当時のハンガリー人一般の興味関心にこたえることのできる内容だったのではないかと思う。また戦間期においてハンガリーではツラニズムの立場からの人種主義的な政治宣伝が、常に日本研究に付きまとうようになるが、『日本語文法』にはツラニズムの影響を看取することはできず、政治的に中立的な書籍であったという点も指摘しておきたい。

『日本語文法』がハンガリーにおけるその後の日本語教育にどのような影響を与えたかはわからないが、この点は戦間期ハンガリーにおける日本語教育史の研究が進むにつれ明らかになると思われる。また周辺諸国の日露戦争当時の日本語教育の事情の研究が進めば、ハンガリーとの共通点、相違点も明らかになり興味深いと思う。

中東欧に限らず、ある地域の日本語教育の歴史を振り返ることは、その国や民族の対日認識の歴史そのものと向き合う作業である。海外における日本語教育が日本以外の地域で、日本人ではない人たちの社会の中で行われる営みである以上、その社会における日本のイメージ、人々の日本に対する感情と無縁ではいられない。海外の日本語教育に携わるものにとって、その地域における日本語教育の歴史は極めて重要な知識なのではないだろうか。今後類似の研究が他の地域でも進むことを筆者は期待している。

#### 参考文献

- 羽場久尾子(編著)(2002)『ハンガリーを知るための47章』, 明石書店。  
矢田俊隆(1994)『ハンガリー・チェコスロヴァキア現代史』(2版2刷), 山川出版社。  
関 正昭(2003)『日本語教育史研究序説』(初版3刷), スリーエーネットワーク。  
日本東欧関係研究会編(1982)『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』。  
牧野伸顕(1992)『回顧録(上)』(4版), 中公文庫。  
伊東孝之他監修(2001)『東欧を知る辞典』(新訂増補版), 平凡社。  
近藤正憲(1999)『戦間期における日洪文化交流の史的展開』。

水原明人 (1994) 『江戸語・東京語・標準語』, 講談社現代新書 .

真田真治 (2002) 『方言の日本地図』, 講談社 .

unknown author (1905) “JAPÁN NYELVTAN (Gyakorlati japán-magyar-német beszélgetésekkel, hét eredeti japán írástáblával)” (Budapest: Révai és Salamon ny.).

Glatz Ferenc 編 (1996) „A Magyarok Krónikája” (2 版), Officina Nova.